アン・ロー先生の講義を聴講して

小　野　順　子

私は、2014年9月から2015年7月までロンドンに滞在し、キングストン大学でロー先生のマードックの小説についての講義を聴講しました。週1回2時間、30単位の授業です。それは、マードックの小説を歴史的、文学的、社会的な背景の中で捉え、彼女の小説を深く理解することを目指しています。前年は、学部の学生は25人でしたが、私が聴講した年は、6人でした。さらに博士号習得を目指す人、研究者も参加していました。9月から3月まで、講義とセミナーで、4月から6月は、自主学習でエッセイを提出します。

授業では、1〜2週かけて一冊の本を扱いました。本、副読本や資料を前もって読んでいることを前提に講義が行われ、さらに議論をしました。本は『網のなか』、『砂の城』、『良きひとと善きひと』、『天使たちの時』、『言葉の子』『海よ、海』、『善き弟子』、『ブラック・プリンス』です。副読本として、*Existentialists and Mystics*、*Metaphysics as a Guide to Morals* の中のその時読んでいる本に関連した論文、ロー先生の *The Visual Arts and the Novels of Iris Murdoch*, “Policemen in a Search Team: Iris Murdoch’s *The Black Prince* and Ian McEwan’s *Atonement*” などを読みました。

授業の一環としてパメラ・オズボーン先生による「マードックの遺産」についての講演もありました。大学に併設されているマードック・アーカイブスを見学しました。さらに小説に出てくる絵を鑑賞するためにナショナル・ギャラリーに行きました。絵は、『鐘』、のヒロイン、ドーラが深い感銘を受けたゲインズバラの『蝶を追う画家の娘たち』、『神聖で俗な愛の機械』のハリエットが張り裂けるような思いに捕らわれたジョルジョーネの『聖アントニウスと聖ゲオルギウス』、と『良きひとと善きひと』のリチャードとポーラにとって官能のあかしであるブロンジーノの『ビーナスとキューピットの寓意』です。ロー先生は小説の

なかで絵画の出てくる文章を抜粋したプリントを配り、学生の質問に周囲の迷惑にならないように小声で丁寧に答えられていました。その事が、印象に残っています。

この授業を受けて、理解するのが困難であったマードックの小説の中に流れている哲学をある程度理解できるようになったと思っています。何度も、自分で足を運んだナショナル･ギャラリーや、ウオレス・コレクションで小説に登場する実物の絵画を鑑賞することによって、絵画が彼女の小説と深く結びついていることを実感として受け入れることができました。滞在中、小説の舞台となったロンドンを散策しました。例えば、『ブラック・プリンス』の舞台となったフィッツロビア界隈は、大都会の裏町で、むさくるしい雰囲気を漂わせていました。

快く聴講させてくださったロー先生に深く感謝しています。